第15回全国障害者スポーツ大会（紀の国わかやま大会）のご報告

第15回全国障害者スポーツ大会（紀の国わかやま大会）の報告をさせていただきます。今年の全国大会は、近畿開催と言うことで、いつもより出場枠が多く、知的障害3名、身体障害3名、合計6名の選手が出場しました。知的障害が上田日月、河内裕亮、原田明彦の各選手、身体障害が古澤明、大石康雄、脇恵子の各選手。役員は是津裕子監督、小島誠コーチ、渡辺孝宏の3人で総勢9人。10代の学生から超がつくような大ベテランまで大変年齢層に幅のある選手団でした。年齢に幅がある分、チームワークはどうなのだろう？と不安も少しありましたが、そんな心配は無用でした。若い選手たちはベテランの選手のみなさんに上手に甘えて、いろいろ教えてもらったりしながら、若手とベテランが融合したとてもよい選手団になったと思います。

結果は、すでにご存じの方も多いと思いますが、あらためて報告させていただきます。金メダルが1（原田）、銀メダルが4（古澤、大石、上田、河内）銅メダルが1（脇）ということでした。卓球競技は、対戦型の競技なので、陸上や水泳などと違って、自己新、大会新というかたちで練習の成果が記録として残ることはありません。必ずどちらかに勝ち負けがついて、あるのは何勝何敗と言う結果だけです。しかし、試合内容を見た時に、「記録」には残らないが、「記憶」に残るという試合があります。今回もそんな対戦が多くありました。最後まであきらめず、粘りにねばった末に惜しくも敗退という試合もあります。大会の中で試合を重ねる毎に、強くなっていく選手もいました。大会の雰囲気にのまれて、必要以上に緊張してしまったり、強い相手に当たり、自分の力が発揮できないまま終わってしまったりして、悔しい思いをした選手もいます。試合が終わって、もっと強くなりたいと、更にレベルの高い競技会をめざそうという選手も出てきました。このままでは終われない、と次をめざす意欲が沸々と沸き上がってきた選手もいます。和歌山大会は終わりましたが、それぞれがすでに新たな目標に向かってスタートを切ったと言えるかもしれません。

県によって差はありますが、全国的に年々レベルが高くなってきていることは間違いありません。滋賀県の選手たちも確実に力をつけてきていますが、上位を目指すためには、更にレベルアップ（技術面、精神面、そして経験値の）が必要であることを痛感した大会でもありました。

今回、和歌山大会に向けた練習会も、指導員、協力員のみなさんとの個別の課題練習、滋賀県障がい者卓球連盟主催の「親睦・技術指導卓球大会」への参加や、一般の選手との合同練習会など、より質の高い練習や経験を積むことができました。選手の要望に応えレベルの高い指導をしていだいた指導員、協力員のみなさん、一日中玉ひろいをして選手をサポートしていただいたみなさん、こうした方々の支えがあって充実した練習をすることができました。

候補選手が選ばれた5月から大会までの間に、滋賀県選手団全体の練習会が合宿をふくめ3回、競技別練習会は、8回におよびました。選手のみなさん、大変お疲れさまでした。ご協力いただきました指導員、協力員のみなさん本当にありがとうございました。指導員、協力員のみなさんのご協力がなければ練習を積み上げていくことはできません。今後ともお力添えをどうかよろしくお願いいたします。

滋賀県選手団　卓球競技コーチ　渡辺孝宏